愛のバス物語 「おもいでの中で」 角純二

つバスの中で「おるおるおる」
繁り事で懸垂する人ッ
整理券を取り忘れ　出発場所からの
料金を払う　見逃しても云えないトッ
降りる口の料金を払うことこそ　小銭を
一枚つつ入れ大行列をつくるトッ
さらに小銭を忘れちゃ困るトッ
座高が高く椅子から頭が飛び出ているトッ
途中で降りるのに一番奥に座るトッ
つゆで言った怒りこそに指で
「ガ」「ピ」「ー」「ッ」とわ機械音を書くトッ
「客がかいて「賓朝だな」と言うトッ
「右手に見えますのは」と言うトッ
チャトイムを先に鳴らすことに燃え
動成功すると力ッ　ボーブをするトッ
バス前に発車オーライと言うトッ
は　しゃいで運転手がマジキしするトッ
座席についた力イの上に座るトッ
いつも座る席がタイトの真下トッ
遠足ではいつも補助席にされるトッ
カンマボコ利子に足をあげているトッ
「おるおるおる」そんな愛すべきトッ
それは　それは　オレのことだぜ！

愛のバス物語 「郷土の御仁」 角純二

バスの中から松江を眺めたならば
あの御仁ならどう思ったろうか？
二百年の歳月がとてもちゃ
姿を変貌させた
武家屋敷敷では甘い物が売られ
城では武者選考ガインスタバ工場する
かつては藩の財政が破綻する
まさにそのときナンバーワンとして
立ち上がった漂々しき御仁
それがらいいつものの命が生まれ散る
変化の渦潮の中でも御仁の響りは残る
お茶、お菓子、そして雲州名物等
松江の隅所に雲潮に残る息遣い
もしもしもあの御仁がバスに乗ったら
天井をガラフラ張りに
出雲なんさんを眺めるだろうか
変化の激しさの中で身をすり減らす
現代人に言うのだろうか
「一服しんさいな」
そうしたらバスという茶室の中で
茶道を知らぬわれは応えよう
「結構なおこまえて」

愛のバス物語 「あとをつぐ者たち へ」 角純二（松江詩人）

愛のバス物語

生きいたバスはこれが最後だなと
幾今をつと思い感を走りだす
すると上ラクターにあいました
ライバ壊れ思ったがすといいので
どうせとれが最後のまりだからと
バスはライトを渡ったました
しばらくするとスポーツカーが
工ンジンが壊れたというので
バスは工ンジンを渡ましたは
もう走ることなどなさまません
今度はムーラーが腐蝕が
車体をムーラーに渡ましたは
まはまたたタンクが　タイヤが
壊れたというので
バスはタイヤを渡ましたは
ついにバスは事廃で
イスだけになりました
「ありがとうと若々しく
走りなりたなる……」
夜になり天には一日月が輝いた
やがたンが賞り渡ってきた
バスのイスを二日月にのせました
生きいたバスはそこから沁る月の
どまたも夜空を走り続けました
ボディーを手にいれいつまでも
生きいたバスはこれが最後だなと

愛のバス物語 「令和バスに名札男達乗り候」 角純二（松江詩人）

愛のバス物語

松江城の姫「あさ姫」は
「維「定宗」に
一生添え遂げたいと思つか
当時のこ時刻　身分の違いは
長髪鬚腹腹　江戸の世ならば
手に手を手をとり　駆け落ちの必定
何処へ向うか　思案の末に
七月七日五丑鐘の刻　稲荷神橋に
遥かの彼方に向う「バス」なる
異国の蒸気力ンが走るという
とまは今　雨上がる七月晩
恋の先を記す姫「定宗」処
「行き先を記す姫「定宗」処」
「誠」記されていた
「長州」「土佐」「薩摩」「会津」と
彼らの胸には名札がありつ
その蒸気力ンの中には無口な
「誠」の羽織を着た美形男子が
「一緒に駆け落ちするか」と
言うのと照れて頬赤に染めた
「誠」の羽織を着た美形男子が
「一緒に駆け落ちするか」と
言うのと照れて頬赤に染めた
終点で降りた二人は身分の記度
無き世に生きせと言うたという
世に何を思うたのか知る由も無
さて「令和」の男達は「令和」の

愛のバス物語 「発車オーライ！」 角純二（松江詩人）

人生はバス　発車オーライ
少々遅れたっていいじゃない
自分のペースで誰かを乗せ
歩めばいいじゃない
途中で降りていいと
それは自由だけど
それは自由だけど
途中で降りて欲しくない
終点まで　いっしょにいたい
そんなひとこんな僕でも
そんなひとが　三人いる
妻と娘と息子かな
いちばん　三人だけ
どうせならたくさん増やそ
こそやかに終点に着たいな
窓の外は　都会の高速道路
気がいたらいいじゃない
いつの間にか景色は田舎道
のんびりと　ゆっくり
バスが　いろんな
生きていれば　いい……

愛のバスもの語 「母の歌」 角純二（松江詩人）

バスの中　様々な人がいた
この中では　自分が一番だと
豪語し　主を云取る人
身勝手な理屈で　隣の席を
席を奪う為　争いを仕掛ける人
席を笑然　追いやられる人々
利害一致で　結び席を組む
互いに手い　奪いあう人々
バス自体を破壊するような
恐ろしき　憎悪の人
そ知らぬ顔で傍観する人
そのバスの名は「地球」

愛のバス物語 「ボンボンの手」 角純二

バスの中で「おるおるおる」
つ　つ　つ　つ　つ　つ　つ　つ
料金を払う　見逃しても云えないトッ
降りる口の料金を払うことこそ　小銭を
一枚つつ入れ大行列をつくるトッ
さらに小銭を忘れちゃ困るトッ
座高が高く椅子から頭が飛び出ているトッ
途中で降りるのに一番奥に座るトッ
つゆで言った怒りこそに指で
「ガ」「ピ」「ー」「ッ」とわ機械音を書くトッ
「客がかいて「賓朝だな」と言うトッ
「右手に見えますのは」と言うトッ
チャトイムを先に鳴らすことに燃え
動成功すると力ッ　ボーブをするトッ
バス前に発車オーライと言うトッ
は　しゃいで運転手がマジキしするトッ
座席についた力イの上に座るトッ
いつも座る席がタイトの真下トッ
遠足ではいつも補助席にされるトッ
カンマボコ利子に足をあげているトッ
「おるおるおる」そんな愛すべきトッ
それは　それは　オレのことだぜ！

愛のバス物語 「郷土の御仁」 角純二

バスの中から松江を眺めたならば
あの御仁ならどう思ったろうか？
二百年の歳月がとてもちゃ
姿を変貌させた
武家屋敷敷では甘い物が売られ
城では武者選考ガインスタバ工場する
かつては藩の財政が破綻する
まさにそのときナンバーワンとして
立ち上がった漂々しき御仁
それがらいいつものの命が生まれ散る
変化の渦潮の中でも御仁の響りは残る
お茶、お菓子、そして雲州名物等
松江の隅所に雲潮に残る息遣い
もしもしもあの御仁がバスに乗ったら
天井をガラフラ張りに
出雲なんさんを眺めるだろうか
変化の激しさの中で身をすり減らす
現代人に言うのだろうか
「一服しんさいな」
そうしたらバスという茶室の中で
茶道を知らぬわれは応えよう
「結構なおこまえて」

愛のバス物語 「おもいでの中で」 角純二（松江詩人）

愛のバス物語

バスの中　様々な人がいた
この中では　自分が一番だと
豪語し　主を云取る人
身勝手な理屈で　隣の席を
席を奪う為　争いを仕掛ける人
席を笑然　追いやられる人々
利害一致で　結び席を組む
互いに手い　奪いあう人々
バス自体を破壊するような
恐ろしき　憎悪の人
そ知らぬ顔で傍観する人
そのバスの名は「地球」

愛のバス物語 「令和バスに名札男達乗り候」 角純二（松江詩人）

愛のバス物語

松江城の姫「あさ姫」は
「維「定宗」に
一生添え遂げたいと思つか
当時のこ時刻　身分の違いは
長髪鬚腹腹　江戸の世ならば
手に手を手をとり　駆け落ちの必定
何処へ向うか　思案の末に
七月七日五丑鐘の刻　稲荷神橋に
遥かの彼方に向う「バス」なる
異国の蒸気力ンが走るという
とまは今　雨上がる七月晩
恋の先を記す姫「定宗」処
「行き先を記す姫「定宗」処」
「誠」記されていた
「長州」「土佐」「薩摩」「会津」と
彼らの胸には名札がありつ
その蒸気力ンの中には無口な
「誠」の羽織を着た美形男子が
「一緒に駆け落ちするか」と
言うのと照れて頬赤に染めた
「誠」の羽織を着た美形男子が
「一緒に駆け落ちするか」と
言うのと照れて頬赤に染めた
終点で降りた二人は身分の記度
無き世に生きせと言うたという
世に何を思うたのか知る由も無
さて「令和」の男達は「令和」の

愛のバス物語 「発車オーライ！」 角純二（松江詩人）

人生はバス　発車オーライ
少々遅れたっていいじゃない
自分のペースで誰かを乗せ
歩めばいいじゃない
途中で降りていいと
それは自由だけど
それは自由だけど
途中で降りて欲しくない
終点まで　いっしょにいたい
そんなひとこんな僕でも
そんなひとが　三人いる
妻と娘と息子かな
いちばん　三人だけ
どうせならたくさん増やそ
こそやかに終点に着たいな
窓の外は　都会の高速道路
気がいたらいいじゃない
いつの間にか景色は田舎道
のんびりと　ゆっくり
バスが　いろんな
生きていれば　いい……

愛のバスもの語 「母の歌」 角純二（松江詩人）

バスの中　様々な人がいた
この中では　自分が一番だと
豪語し　主を云取る人
身勝手な理屈で　隣の席を
席を奪う為　争いを仕掛ける人
席を笑然　追いやられる人々
利害一致で　結び席を組む
互いに手い　奪いあう人々
バス自体を破壊するような
恐ろしき　憎悪の人
そ知らぬ顔で傍観する人
そのバスの名は「地球」

愛のバス物語 「宇宙」 角純二

最終のバスに乗り込み
座席に身を沈めた途端
こいつ　こいつ
はつと　まぶたを　ひらいと
車内には　僕ひとり
どの車内につまれ　ゆらゆらゆら
窓の外が　窓の外　ひらひら　ひらひら
誘われて　のぞきこめば
そこに銀河が　ひろがっていた
僕のからだは　バスをすりぬけ
果てない宇宙に　溶け込んでいい

宇宙が　僕なのか……
僕が　宇宙なのか……
宇宙の中に　僕がいるのか……
僕の中に　宇宙があるのか……

どれはどのときが　流れたのか
どの車内のバスの中は　あたたかい
心地よい　つかいしした鼓動が
どいんん　どいんん
どこかた　ききのはてのある声が
「もういい　産まれていいのねん」

愛のバス物語 「流星」 角純二

「バスを降りたら　つぎは
いつ　逢えるのかしら」
「だぶん　生まれかわって
別の星だろうな」
バスが　跳ねた拍子に
あなたの肩に　額をあずけ
いちばん　落ち着く場所
ずっと　こうして　いたい
永遠の眠りに　つきたい……
あなたの手を乱暴に　握り絞め
薬指の銘の輪が　憎らしい
涙が流星の如く　頬をつたう
「泣くやつがあるか　また逢える
楽しみが　増えたってことさ」
窓の外　駅の姿が断頭台に見える
もういつぎ　バスを降りたら
私は　彷徨う　旅人
何億年待つ　いのかしら……

愛のバス物語 「浮子」 角純二

このひと　バスフ手だから詳しいよ
バスフ手いいな　バスアンと言え
家から出るときに「発車オーライ！」
言うか！　行ってきますだろう
自己紹介のとき自分をバスに たとえる
私は高速バスみたいなもの言われたろう
光速バスってマンハッタンと走ると思ったた
思うか？「光速」じゃなくて高速だろう
バスに乗ったら つっぱで十字懸垂！
体操部か！　池谷か！
「回送」行きバスに乗ろうとした
乗るか！　まをあげたら注目されるか！
バスの降車ボタン手押しで熱くなる
なるか！　こどもか！
愛読書は「愛のバス物語」
それは素晴らしいだろう
遠足のときはいつも補助席！
それはお前や！
出動のとき乗るバスで　私を見送れ
ブロポーズ！
それは俺や（赤面）やめさせろ　うわ

愛のバス物語 「ぶらり手」 角純二

愛のバス物語

最終のバスに　乗り込み
座席に身を沈めた　途端
こいつ　こいつ
はつと　まぶたを　ひらいと
車内には　僕ひとり
どの車内につつまれ　ゆらゆらゆら
窓の外が　窓の外　ひらひら　ひらひら
誘われて　のぞきこめば
そこに銀河が　ひろがっていた
僕のからだは　バスをすりぬけ
果てない宇宙に　溶け込んでいい

宇宙が　僕なのか……
僕が　宇宙なのか……
宇宙の中に　僕がいるのか……
僕の中に　宇宙があるのか……

どれはどのときが　流れたのか
どの車内のバスの中は　あたたかい
心地よい　つかいしした鼓動が
どいんん　どいんん
どこかた　ききのはてのある声が
「もういい　産まれていいのねん」

愛のバス物語 「ぶらり手」 角純二

再びバスが　あなたを運んで来た
少しだけ　バスちゃんとなった　私のもとに
十四年はなにを感じて　歩る場所もつあなたは
「縦横」と　手を握み　家庭を築く
それが女性の手せなんて　バスで手つたの
女性の手せなんて　私の手せなんて
私以外に　決められないのに
笑いながら　涙が止まらなかった
「あなたの言いつけを守り　結婚したけど
一緒のとき　涙　溢れ　悲しい思い続けたよ
時は流れ　我だけ　乗立ち　手　人　そして　夫　子　孫
あなたも同じことが　あったのかしら
絶えることが　解くのに苦労する　里の　ネ　ン　ト
つかけ　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
初めて　ちゃ　ん　と　手　刺　た　青　を　飾　り　用　の　ア　ス
大切なあなたを待ちかねるのもう　の　日　と　最　後
思い続ければ　いつかは　ち　こ　と　嬉　し　な　い
それが私の　真実の幸せ　でした
踊りたい気分の私の前　バスの　ア　ス　は　開き
目　前　の　ス　ち　幾　重　と　増　え　た　重　瞼　の　な　た
「柔らかく　優　か　し　い　笑　み　を　た　た　え　る　ば　た
「もう　離　れ　な　い　か　ら……」
貝殻　握　り　に　繋　ん　だ　指　に　力　を　込　め　て
「もう　絶　対　に　離　れ　ま　せ　ん　わ　ん　と　言　い　な　が　ら
あ　の　日　の　続　き　の　キ　ス　を　交　わ　し　た　の

愛のバス物語 「縛り手」 角純二

漂　雲　に　包　ま　れ　し　車　内　で　真　っ　暗　に
浸　銀　さ　れ　い　い　景　色　を　見　守　っ　た
身　ち　ら　ち　慢　れ　に　繋　り　合　っ　て　い　た　い
揺　り　籠　の　如　く　バ　ス　は
岩　を　と　た　ち　に　分　担　し　て　揺　す
優　し　い　母　の　腕　で　あ　や　さ　れ　る　ち　こ　と
（里　母　な　い　こ　ま　す　が　な　い……）
縄　張　り　意　を　ま　ち　が　の　ち　ち　の　絆　の　外　の　世　界　が
闇　に　の　ま　れ　ち　こ　と　を　期　待　し　た
ゆ　や　ば　ち　こ　と　れ　は　深　い　に　変　わ　る
辺　り　が　暗　く　な　れ　な　な　る　ま　で　い
車　内　の　様　子　が　ま　ち　こ　と　感　じ　る　な
な　な　る　意　を　隠　す　こ　と　に　慣　れ　た　た
終　行　バ　ス　に　揺　れ　な　が　ら　縄　張　り　の　小　女　を　見　つ　け　た
微　笑　ん　だ　無　数　の　流　れ　星　が　彼　女　を　迎　る
そ　し　て　無　数　の　流　れ　星　が　彼　女　を　迎　る
ま　ち　こ　と　里　母　の　ち　ち　こ……
爆　然　と　の　花　弁　が　ち　ら　ち　ら　と　降　ち　バ
万　華　鏡　の　中　に　舞　う　蝶　の　舞　い　に　そ　ら　れ　た
地　の　底　に　ゆ　っ　く　り　と　落　ち　て　い　く
ふ　わ　り　ふ　わ　り　と　眠　り　な　が　ら　深　く
どこ　ま　で　も　ど　こ　ま　で　も　ど　こ　ま　で　も　ど　こ　ま　で　も
身　体　か　ら　は　離　れ　た　魂　が　浮　き　な　が　ら　の　ん　び　り　と
それ　は　遥　か　の　中　で　目　を　覚　ま　し　た　知　ら　ず　に

愛のバス物語 「ぶらり手」 角純二

愛のバス物語

本　黒　れ　口　は　バ　ス　の　窓　か　ら　斬　り　私　達　を　見　る
喜　本　の　切　は　三　十　年　前　当　然　に　感　じ　た　な　が
今　注　新　鮮　に　そ　し　て　優　し　く　無　で　か　け　る
内　緒　に　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
あ　の　頃　父　様　食　飲　み　母　に　乗　力　を　ふ　る　い
歌　手　に　な　る　と　言　は　た　私　を　お　も　い　き　り　殴　っ　た
母　な　ら　の　な　な　に　涙　は　止　ま　ら　な　か　っ　た
都　会　に　憧　を　出　し　溶　れ　難　破　し　た　私　は
リ　ス　ク　ト　の　痛　が　刻　ま　れ　た
それ　を　感　じ　た　の　は　樹　で　景　色　に　見　と　れ　る
中　国　産　れ　の　彼　の　仏　さ　ま　た
突　然　無　尽　た　私　と　彼　に　父　は　オ　ロ　レ
母　は　産　後　の　実　頭　で　知　ス　ス　れ　た
どう　や　ら　父　と　母　の　手　寿　は　逆　転　し　た　い
「右手に見えますのは」と言うトッ
「客がかいて「賓朝だな」と言うトッ
「酒はちゃ飲むこと　あはかん！」
「村長はいつもバスの一頭をせて
ともともと　だうえ」
「ア　ン　ビ　の　次　は　ル　ー　ル　が　か　ま　け　て
ふ　ん　ま　に　私　が　こ　れ　で　す」
「純ちゃん　高校は　どうだ　や
彼女　が　で　き　た　か　や？」
いつもの私の不用意な問いかけに
うまいな！と思っていたが　あの頃は
優しさに包まれていたような気がする
人生は人の中にいると優しいなれること
今頃気がついた
あれから三十年　いまのバスには
人の言葉が全く聞こえない
いつの間にか　人と人との間に
カベをつくる自分がいい
「静寂さだけが　バスにある……
「静寂は嫌いだ！」